理想的コミュニティーを目指すゴダンのファミリステールについて

- 19世紀における労働者向けのコミュニティモデルに関する研究 その1 -

GODIN'S FAMILISTÈRE AIMING AT THE IDEALISTIC COMMUNITY

- A study on community model for laborers in the 19th century Part 1 -

白 承 冠*

Seung-kwan BAEK

This paper aims to study on a community model called Godin's Familistère of collective housing for laborers in the 19th century. Utopian socialists in the first half of the 19th century proposed different solutions to reform their chaotic capitalist society, as they criticized the maladies of the Industrial Revolution. Fourier designed a community model called Phalanstère, in which production, consumption, and residence coexisted as a cooperative society, and his disciples tried in vain to make it real. Only Familistère, which was constructed in Guise, France from 1858 by the successful entrepreneur Godin, was considered a successful example of the idealistic residential community. However, Familistère was not simply a realization of Fourier's plans, but an original experiment by Godin. Familistère had many kinds of common facilities that were useful for a convenient life, which was the equivalent of having wealth. Moreover, Familistère was a community of production, distribution, consumption, education, leisure, and residence, all of which were connected to work sites. The community also featured a cooperative society of consumption, medical services by the cooperative system, and space for schools and leisure.

Keywords : *Idealistic Community, New Harmony, Phalanstère, Jean-Baptist André Godin, Familistère*

理想的コミュニティー, ニュー・ハーモニー, ファランステール, ジャン・バティスト・ゴダン, ファミリステール

1. はじめに

1-1. 研究の背景

都市的観点から西洋の近現代建築の歴史を記述したベネヴォロの研究によると、古代から現代に至るまで多くの人々は理想都市を目指し、それを表してきた。とくに19世紀半ばという時期は、産業革命による劣悪な衛生環境や都市・住居および労働環境が社会的問題になった時期であり、住居環境が人間の暮らしの支えとならなかった。これに伴い公衆衛生に対する関心が高まり、ユートピア社会主義者はその解決策として理想的な都市共同体を計画し、実現化することを試みた^{注1)}。このような実験の多くは失敗に終わってしまったが、フランス北部にあるギーズには19世紀半ばに企業家ゴダンにより建てられたファミリステールという共同住宅団地が残されている。このファミリステールはフーリエの思想を継承したという理念の特徴のみならず、当時の社会問題に対する解決策として実験されたという実質的な側面を反映している。

ゴダンのファミリステールに関する既往研究および報告書などによると、その解釈はおおむね二つに分かる。第一はフーリエの思想及び理想共同体がそのままゴダンによって実現化されたという解釈であり、第二は基本的にはフーリエの影響を受けているものの、フーリエの理想共同体とは異なる「独自の実践」であったという解釈である。とくに既往研究においては、フーリエの思想がゴダンに

よって実現化されたという前者の解釈を強調する研究が多い^{注2)}。

しかしながら、ゴダンが若い時にフーリエのユートピア社会主義の思想を経験したことでフーリエが構想したファランステールという理想共同体をそのまま実現化した、と見ることには限界がある。いわゆるファミリステールには、フーリエの理念とは異なるユートピア社会主義・社会経済学・雇用主温情主義・改良的社会主義などの多様な思想が現れているためである。以上のような観点から既往研究においては、主に社会学的な研究がなされており、建築・都市史的な観点からの研究は少ないと言える。

1-2. 本稿の目的と研究範囲上の限界

本研究の目的は、ゴダンのファミリステールを中心とした19世紀の労働者向けのコミュニティモデルに関する建築・都市史的研究の一環として近代思想史、近代都市論、社会思想史に及ぶ多くの優れた研究も含む既往研究批評、すなわち、ゴダンの試みはフーリエ思想の直線的な実践化ではなく、独自路線の強いものであるという仮説に基づき、建築・都市史的立場から行い、そうした観点からファミリステールを再考し新しい知見の導入を目指すものである。

よって、本稿では、ファミリステールにおいての具体的な建築的・都市的計画(1858)に至るまでのゴダンの諸経験に基づいた理念の形成過程を明らかにし、フーリエ、オーエンのコミュニティー実験が失敗に終わった理由の分析なども含め、一連の理想都

* 東京大学大学院工学系研究科建築学専攻
大学院生・修士(工学)

Graduate Student, Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Univ. of Tokyo, M. Eng.

市計画の整理を行う。そして、ファミリステールとの相関、差異などを明らかにすることで、コミュニティ理論から実行へ移したゴダン独自の社会思想と彼の理想的コミュニティに向けた労働者住宅に対する考え方について明らかにする。

以上のように、本稿の射程は、本筆者が目指す一連の研究目的の中で、(1)「ファミリステールの実験の独自性と理想的コミュニティに向けた労働者住宅に対するゴダンの考え方」について明らかにすることである。ただし、それに際して(2)「建築・都市的側面からみた」ファミリステールの分析、ならびに(3)「19世紀から現代に至るまでの歴史的建造物としての保存・活用」については、本稿では扱わず別稿で論じたい。

1-3. 研究の方法および資料について

本研究は既往文献調査と2008年10月1日から12月31日まで行った現地調査研究を二つの柱としている。とくに現地調査で得られた文献資料およびファミリステール協会(Le Syndicat Mixte du Familistère Godin)の総責任者、フレデリック・パニ(Frédéric k. Panni)との単独インタビューで得られた成果をもとにしている。本研究はこのように精緻な実証研究を積み重ねることで、ファミリステールに関する全体像を明らかに抽出することとする。

まず、本稿では既往文献を用いながらフリーエ、オーウェンを中心とした一連の理想都市計画実験の整理を行い、それらとゴダンのファミリステールとの相関、差異などを分析する。また、ゴダンの試みはフリーエ思想の直線的な実践化ではなく、独自路線の強いものであるという仮説を裏付けるために、ゴダンの著書の『社会的解決』^{注3)}と『ゴダンとフリーエ主義者のカルランが交わした手紙』^{注4)}の分析を行うとともに、ファミリステール協会の総責任者のパニとのインタビュー内容の分析と解釈を行う。そうしたうえで、今後のファミリステールの建設につながるにおいて、どのような意味を持つのか考察する。

2. 19世紀における理想的コミュニティモデルに向かう建築的実験

2-1. 労働者向けのコミュニティ建設の試み

18世紀後半からは産業革命によって数多くの労働者たちが工場に雇用された。農村人口の都市への流入は必然的な結果であったものの、「中世都市生活の枠組みを抜け出せなかった当時の都市形態には、急激に増加した労働人口を受け入れる文化施設を設けた住居団地はあまり存在しなかった。そのため、労働者階層は劣悪な住居環境がもたらす犯罪や各種伝染病にかかる可能性が高くなるなど、貧困に苦しみ次々と空き地に不法に住む人々が増え、スラムが形成されていた」^{注5)}。こうした状況の中で、労働者と貧民の住宅問題に対して彼らの観点から解決策を提案したのは建築家たちではなく、空想(ユートピア)的社会主義者たちであった。この空想的社会主義者たちは社会の否定的な変化に関心を高めて劣悪な都市環境で生活する労働者たちの共同生活のための理想的コミュニティモデルを構想した。いわゆる人間と社会、そして、労働と資本の新たな秩序を構築し、漸進的かつ平和的方法で新しい社会を建設しようとする多様な方案を提示したのである。とくに労働者向けの協同組合的生産、分配、消費、余暇生活が可能なコミュニティを建設し、こうしたコミュニティの拡散を通じて、資本主義社会を改良しようとした。しかし、このように労働者たちが人間としての尊厳と自由を回復し、

豊かな生活が実現できるためのコミュニティが建設されたものの、当時の空想的社会主義者たちによる理論上の運営方式は実際に適用されずに計画に留まったと言える。

ここではその代表的な一例として、オーエンのニュー・ハーモニーとフリーエのファランステールというコミュニティモデルについてとりあげる。まず工業資本家のオーエンはアメリカのインディアナ州に「敷地500ha、人口およそ1200人のコミュニティモデル」を提案した^{注6)}。このモデルは、図1のように長方形の建物群で構成され、その中の「三面は夫婦と3才以下の子供の個別住居の集合体である。残り一面は3才以上の子供たちの寝室、客室、病室などで構成されている。中央の建物には、共同炊事場や食堂などがあり、その右側にある建物の一階は幼児のための学校に使われ、その残り部分が講堂と礼拝堂に充てられている。右手の建物の一階には年長の子供達のための学校と委員会室がある。その階上は図書館と成人のための諸室に充てられる。また、建物によって囲まれる四角形の空地は、体育とレクリエーションのための空間に当てられる」^{注7)}。建物の外側は庭園や環状道路で囲まれており、この環状道路の外側は工場、洗濯場、製粉所、屠殺場、畜舎、農機具倉庫などの生産施設に充てられている。とくに裁判所や刑務所などは、新しい社会では必要ないと考えられ、設置されていない。このように、オーエンのコミュニティモデルは平等な住民構成と温情主義的共産主義に立脚し、当時苛酷な工場労働が一般化されていた児童と主婦を保護するための心配りが反映されている。

図1 ニュー・ハーモニー^{注8)}

一方、フリーエは資本主義そのものに対する批判から、お互いが他人の権利と利益を尊重しながらも、各個人の自由を最大限保障する改革された社会を目指しており、最終的に調和のとれた理想的な社会として、「ファランジェ」と呼ばれるコミュニティモデルを構想するようになった。このファランジェとは、共同生産・共同消費の共同体である。その村の中心には「ファランステール」と呼ばれる全ての機能を揃えた巨大な共同住宅を設けており、それはファランジェの外からやってきた来客の宿泊もできるもので迎賓館の役割も持っていた^{注9)}。(図2)そして、ファランジェの構想においては私有財産が認められていたことが一つの特徴であり、このフリーエのファランジェを株式会社で建設しようとした試みがフリーエの弟子のコンシデランによって実際にアメリカで実験されたものの、これは結局失敗に終わってしまった。

ファランステールの中央部は公共的な機能、すなわち食堂、情念取引所、評議会室、図書館、研究室に充てられた。この中心部には、神殿、秩序の塔、電信局、郵便局が配置され、パレード用の中庭の背後には常緑樹の植え込まれた冬の庭が設けられた。翼棟の一方には大工、鍛冶屋、子どもたちの集会室といった騒がしい部屋をすべて集めている。またもう一方の翼棟には、舞踏室および訪問客との

応接室をそなえた大ホールが設置されることになる。これはこうした諸室がパレの中心部の妨げになったり、ファランジェの家庭的な関係を乱したりすることがないためである^{注10)}。

図2 ファランステール^{注11)}

つまり、フーリエのファランステールにはその中心に人々が交流できる空間、いわゆる人々が簡単に疎通して交流し、和合をはかるための精神的かつ肉体的、そして家族融合円満を願うコミュニティ空間が構想されている。すなわち、建築物の空間的配置がそのままコミュニティ空間を作り出しているのである。とくにこれは当時の労働者や貧民などの劣悪な生活環境に注目した人々のみならず、資本主義がもたらした競争や敵対など、その問題点に興味を持っていた人々から大きな関心を引いた。また当時においては、きちんと構想された設計図は庶民住宅や労働者住宅おろか、他の事例にもほとんど存在しなかったため、フーリエの構想は非常に強力な影響を残したと言われる。

2-2. 19世紀における理想的コミュニティモデルの失敗とその限界

1824年から1829年にかけて、アメリカのインディアナ州で試みられたオーエンのニュー・ハーモニーというコミュニティモデルの建設は失敗に終り、ファランステールというコミュニティモデルを創案したフーリエも生前にこれを建設することはなかった。ついでフーリエの弟子コンシデラン (Victor Considerant) もファランステールを設計した後、1850年代初頭アメリカのテキサスでこれを具体化しようとしたものの、失敗に終わってしまった。また、フーリエ主義者のカルラン (Victor Calland) が計画した社会宮殿^{注12)}も実際に実現されることがなかった。このように、オーエンは生産者たちの間の共同生産と平等な取り引きの共同組合を通じて協同村を成し遂げようとし、フーリエは自由な情念の再組織化を通じて楽しい労働社会を造ろうとした^{注13)}。

しかしながら、ここでニュー・ハーモニーとファランステールというコミュニティモデルの建設の試みは、何故失敗に終わってしまったのか、すなわちこのようなコミュニティ原理が実際の運営過程で直面することになった問題は何であったかについて着目したい。

もちろんオーエンとフーリエの提案が当時、そして後世に及ぼした影響と連続性を考慮するならば、これらの実験が決して失敗したとは言えないだろう。ただし、ここでは1820年代から1850年代に至るまでのオーエンとフーリエの直接的影響を受けたコミュニティモデルの実験が直面することになった問題点を調べ、それらの共同体モデルが持つ限界について述べたい。

まず、オーエンの提案においては資本階級の威勢が強かったイギリスでは実現されずに、1825年インディアナ州で実験されるものの、住民たちの間の不和と経済的な問題により失敗に終わった。オーエンのニュー・ハーモニーが解散することになった主要原因とは、「その中で発生した階層間の葛藤」と指摘される^{注14)}。

これについては1834年以降に建設された協同村の事例にもよく現れている。「オーエンはイギリスでの協同組合運動の経験を土台に再度北アメリカに協同組合村を設けた。しかし1846年に労働者階級と中産階級の間の深刻な紛争によって解体された。労働者階級は協同組合村が完全な民主主義により運営され、すべての居住者達が経営維持に参与することを要求した反面、資本の相当部分を占有した中産階級は経営維持に対する統制権を主張した。結局、オーエンの同意を得て選出された中産階級出身の評議員達は労働階級出身の評議員達と衝突することになったのである」^{注15)}。さらに、「住民たちの間のコミュニティーの形成を促す場の役割が不透明であったという点、そして運営的側面からみた制度の不備、企業家と労働者たちの間の責任と権利を規定し共同体を運営するための協会がなかったという点」も指摘される^{注16)}。

このようにオーエンのコミュニティモデルは、理論から実際の運営に至るまで、彼のコミュニティ実験が現実的に続けられなかった複合的な要因が重なっている。その中で、共同体構成員たち間の自発的かつ自由な意見によってではなく、中央の計画により運営されたという点、すなわち、上からの計画を通じた共同体は人々を自由な主体にも、共同体の主体としても作り出すことはできないということを示唆していると考えられる。

ついでフーリエのファランステール実験の失敗から現れたその限界点を論じる前に、彼の思想について述べておきたい。

フーリエは、大規模産業の文明時代は人類に物質的な豊かさをもたらしたのではなく、多数の貧困を引き起こして、生産に直接参加しないまま独占や投機などを通じて「商業的封建主義」を構築したブルジョアのような寄生的人間を量産したと見なされている。また、フーリエは労働からの疎外を生み出した産業分化に対して批判し、労働が一人一人の欲求を充足させるように協同組合的共同体の理論を重視した。さらに産業文明は強者と弱者、そして資本家階級と労働者階級の間の格差と葛藤を助長することによって、次第に一人一人は自身の利益だけを追求するために反社会的な葛藤を引き起こすと認識していた。それゆえ機械文明への依存は、人間社会を動かす情念の法則を無視して人間としての機能や感性を失わせ、幸福を抑制すると主張した。一方、情念は感覚的、感情的、複合的情念で構成され、個人的な満足、周辺の人々との関係、社会的関係などを通じて満たされ、結局、こうしたものが皆満足されたときに「調和のとれた社会」が到来すると述べている^{注17)}。

フーリエが想定する人類の最終段階、調和のとれた社会はファランジェという農業中心の自給自足システム、と協同組合的なコミュニティーの建設によって実現される。人口およそ1800人の多様な才能を持つ老若男女で構成されたファランジェにおける労働は、人々の自我と個性の積極的表現であり、欲求充足のための楽しい遊戯と想定された。ファランステールの個人の配当金は、資本、労働、才能に対してそれぞれ4:5:3の割合で分配される。一方、個人差から来る貧富格差は存在するものの最低生計保障制度を実施することで、皆が消費と余暇を楽しめるように工夫がなされていた。ただしフーリエは女性の平等権の擁護や職業活動を強調しながらも、一夫一婦制に基づいた家族制度が各々の自由な性的欲望の充足と子供の社会的養育を消滅させると想定した^{注18)}。

一方、フーリエのこのような提案は、1840年代から1850年代にか

けてアメリカで数多くのコミュニティモデルが造られるほど、その影響は大きかったと言える。けれども内部的にはすべての人々に自分の環境に合わせて仕事をする権利があると想定するにもかかわらず、同時にそのコミュニティが維持されるために、すべての構成員たちを一日に15時間以上の仕事に従事させる作業時刻表を提示しており、重大な矛盾点が現れる。それゆえ多くの論者たちは、アメリカでのファランステールの実験が失敗に終わった理由として、本来その意に共感して資本を持って集まった人々がそのコミュニティの中の労働活動を通じて楽しみを享受することができなかったこと、そして、資本の不足と運営上の問題でコミュニティが解散することになったことなどを指摘している^{注19)}。とくに工業と一夫一婦制を中心とする家族指向的コミュニティの実験ではなく、農業と一夫多妻制を中心とした共同生活を前提としたという点からも、大いにその限界点が顕れると言えるのである。

3. 理想的なコミュニティを目指すゴダンのファミリステール

3-1. ファミリステールとは

ファミリステールは、フランスのパリから北東側に約200km離れているギーズという町で1858年から20年かけて企業家のゴダンによって建てられ、現存している共同住宅団地である。2回の世界大戦期により建物の一部が壊れ、幾度も経済危機にさらされたにもかかわらず、工場は着実に成長発展した。1950年から1960年に至るまでは、産業的發展を達成したものの、以後数多くの経済的困難に直面することになる。

図3 ファミリステール^{注20)}

1968年には協会 (Association du capital et du travail) が解散されたことにあたって、工場は株式会社の形態になった。1969年、庭園や付属建物(劇場、学校、図書館)などが市の所有になり、住宅も売られ、ファミリステールの実験は一段落された。2000年以來は、「フランス文化省による歴史記念物」と指定され^{注21)}、地方自治体・政府・ヨーロッパ連合の補助金を受けながら、経済・文化・建築分野で多様な社会教育的活動を展開している^{注22)}。

3-2. ジャン・バティスト・ゴダンの社会思想に関する考察

ゴダンは1817年ギーズにほど近いエスケーエリ (Esquéhéries) で鋳前職人の息子として生まれた。小学校を卒業し、父親から職業訓練を受けた後、サンシモン主義者であった従兄とともに1834年から18

図4 ファミリステールの労働者たち^{注23)}

37年にかけてフランス旅行をし、労働者の劣悪な生活環境を目にす

る。1840年には、かまど(鑄鉄製)と暖房機の製造・技術の特許を取り、父親の職業場で二人の労働者を雇用し、ゴダンという名称で販売を開始した^{注24)}。1842年からはフーリエ主義者との交流を初め、1846年ギーズに工場を建てた後、多額の資金を集めながらフーリエ主義者の活動を経済的に支援することになる^{注25)}。

ついでゴダンはフーリエ主義者たちとの交流を通じてフーリエの思想を受け入れたものの、次第に独自の思想体系を確立してゆく。ゴダンが自身の思想を表明し始めたのは1871年に出版された『社会的解決 (Solutions sociales)』を通じて、ファミリステールの建設理由について明らかにしてからである。引きつづき1880年代に書かれた一連の著書、とくに「社会的相互扶助と資本と労働の連合」「政府」「労働の共和国」など核心的著作を通じて、自身の社会思想を体系的に示した。

一方、ゴダンが診断する文明の弊害はフーリエの見解と似通っており、文明化された利己心はすべての社会的悪の根源であり、そして労働分業は個人の人生を不安定にさせ、浅はかな競争と貧困を深化させると考えていた。さらに人間の利己心は「自らの必要な様々なことを受け入れることだけでは飽き足りない」いわゆる破壊、盗み、奴隷、人間による人間の隷属などをもたらす^{注26)}。また、「社会的富を目的としない競争、投機、労働搾取など」によって、貧困が発生すると考えている^{注27)}。こうしたゴダンの文明の弊害を克服するための社会思想は、相互に関連する五つの核心的思想によって構成される。ここにフーリエの概念を踏まえ、新たな社会を目指すゴダンの構想を窺うことができる。その核心的思想について見ると、以下ようになる。

第一に、道徳と労働の強調である。これに関してゴダンは、「近代産業社会は巨大な富を創り出して、皆のニーズを満足させる可能性を高めたものの、大多数が事実上ニーズを充足することができない。その根本的な原因としては、一人一人が自身のためにだけ没頭するためである。それゆえ、利己主義の代りに友愛を目標にする道徳的基礎の確立が必要である。すなわち、一人一人の欲求を満足させながら、調和のとれた人生を維持し、社会を発展させ、社会的幸福を追求するためには、相互に繋がれた権利、義務、正義という三の概念を受け入れる道徳的高揚が必要になる」と述べている^{注28)}。また、「義務がなければ権利も存在しないし、権利がなければ義務も存在しない。そして、権利と義務は正義に従属し、権利と義務の間の均衡を成立させるのが正義である」と強調している^{注29)}。つまり、ゴダンは「義務、権利、正義を認識するようにさせる道徳的高揚の根源的な手段は労働であり、労働は生産、消費、分配原則の基礎となり、人生を守り、発展させ維持する道徳的価値の中で最も重要な価値である」と述べている^{注30)}。

第二に、協同組合や協会を強調し、これを通じて資本と労働を結合させ、分配の正義を追求するべきであると主張している。ゴダンは、自由主義経済は資本と労働の対立および葛藤を誘発し、労働者たちを貧困に落とし込め、労働を資本に隷属させると見なした。従って、こうした状況を克服するためには「資本が労働に奉仕するようにするべきであり、資本は過去の労働の結果であるから私的所有は認定される」と述べている^{注31)}。資本は過去の労働の成果物であるため、現在の労働と簡単に結合できると想定し、資本と労働の調和のために協同組合・協会の構成が必要であり、これ

ら組織体は資本と労働において有用性を提供すると考えた。ゴダンの思想における協同組合は、生産して購入し、販売して消費することを望む人々が知識、意志、利害関係などの結合を通じて、共通の有用性を追求する目的で企画する人々との間の合意である。つまり、ゴダンにとって「協同組合は経済的な領域で、協会は社会的な領域で強調」されており、この協同組合と協会は「労働者達に労働の代価としての物質的な便宜を提供することだけではなく、各種の社会的・環境的な問題に対する予防策を設けることが必要である」と考えたのである^{注32)}。

第三は、国家的次元からの貧困消滅のための社会的相互扶助の強調である。貧困消滅は社会における最初の義務であり、国家は相互扶助体系を通じて民衆に奉仕するべきであるとゴダンは見なした。すなわち、国家的次元からの相互扶助を組織することを社会改革の過程で取り組むべき最初の課題と考えたのである^{注33)}。さらに、相互扶助機構は民主的選挙を通じて、労使代表者から構成され、労使の各々の分担金で運営される。それゆえ、国家においてはこうした体系を社会的に広げて財政支援をするべきであり、同時に各個人が死亡した場合は、すべての財産を国家に還元して充当することとなっていた^{注34)}。とくにゴダンは社会立法を通じて人々の暮らしを補助し、基本的に人間の必要とするもの、すなわち基本生計、住宅、衣服、新鮮な空気、光、緑地空間、公衆衛生などを充足するべきであると述べている^{注35)}。

第四にゴダンは社会、あるいは国家間の関係において暴力を拒否し、平和主義を擁護することを思考した。作業現場での労使間の平和は理解の収斂、基本合意原則の尊重、混合組合(syndicat mixte)設立などで可能になるとした。とくに労働者たちの企業に対する参加など、労働と資本の連合を強調している^{注36)}。

最後に、新しい社会においては一人一人の知的かつ道徳的解放のために教育と住宅、広い意味での建築の役割が重要であるとしている。とくに教育よりも重要なのが住宅で、個人や社会が必要とする生活環境を十分に備えた新しい建築の適用を強調している^{注37)}。ゴダンはブルジョアジーの個人住宅に設置される衛生設備と家政婦、保母、料理人等を雇用し、各種サービスを受けることを「富に相当すること(équivalents de la richesse)」と称して、こうした設備とサービスを受けることができない労働者たちのために統合的な住居団地を提示した^{注38)}。この住居団地には多様な階層が一緒に暮らしながら、社会性を向上させ、人間としての階層を越えた友愛を拡大してゆく。さらに統合的な住居団地には女性が家事労働と子育てから解放され、経済的かつ政治的活動に参加することができるよう各種家庭生活サービスが提供されるのだらうと述べている^{注39)}。つまり、こうした住居環境におけるゴダンの考え方は、社会の発展に繋がるものであった。

このようなゴダンの社会思想の中で協同組合、住宅の重要性、女性解放の条件などは、フーリエの考えを受け入れ発展させたものである。しかしながら、フーリエが強調する情念の法則の代わりに道徳と労働を強調し、国家的次元からの社会的相互扶助や社会的立法活動を強調することはフーリエとは関連がない。こうしたゴダンの社会思想が現実に適用され実験された場所がファミリステールであった。

3-3. 理想的コミュニティへ向かうゴダンの労働者住宅に対する再考察

ゴダンが考える住宅問題、あるいはより一般的に建築問題は、社会的進歩の指標で認識された。彼は「貧しい家族を便利な住宅で生活できるようにし、その住宅周囲をブルジョアジーが受けている豊かな生活設備で囲むこと、住宅を静かで安楽な休息の空間とすること、ブルジョアジーが家庭で受けるサービスを公共サービス制度に変えることなど、これらが物質的かつ知的幸福から排除された労働者家族たちのために、そしてすべての人のために実現されるべきと考えた^{注40)}。さらにこのような住宅だけではなく、豊かな生活のための各種生活設備やサービスなどが必要であると考えていた。しかしこうした設備やサービスなどは、経済的な理由で労働者の個人住宅に設けることができないため、共同で用意する住宅団地の建設が必要であると表明している。

このような共同住宅団地は、単に狭い宅地により多くの住宅を作るためのものでなく、居住という住宅の単なる機能を越えて、個人と家族の人生を取り巻くすべての要素を含む統合的な役割を担う。こうした住居環境では、居住者たちが共同体的かつ社会的な生活を営み、コミュニティ形成を促すとともに、個人の真の尊厳性を与えられる。このようにゴダンは労働者向けのコミュニティモデルに対する再考察を経てファミリステールという統合的な住居団地を計画することになったのである^{注41)}。

こうした理想的コミュニティに向けたゴダンの労働者住宅に対する考え方にに基づき、1853年にフーリエ主義者コンシデランとアメリカのテキサスにファランステールの建設を試みるものの、失敗に終わってしまう^{注42)}。フランスに戻ってきたゴダンは1857年に自身の工場労働者たちのための共同住宅団地を建設しようとする。1857年12月ゴダンは社会宮殿を計画したフーリエ主義者カルランと手紙のやりとりをしながら、自身の計画案を提案し、ギーズの労働者向けコミュニティモデルを準備するが順調ではなかった。また、カルランと共に社会宮殿を計画した建築家ルノアール(Albert Lenoir)がギーズを訪問して、具体的な計画を準備したものの、ゴダンは自らファミリステールという理想的コミュニティモデルを設計したのである^{注43)}。

図5 脳頭蓋の人間のニーズの局地化(左)、ファミリステール計画案(右)^{注44)}

4. まとめと今後の課題

本稿では、ゴダンのファミリステールを中心とした19世紀の労働者向けのコミュニティモデルに関する建築・都市史的研究の一環として、19世紀半ばに建てられ歴史的建造物として現存する集合住宅団地、ゴダンのファミリステールについて以下のことを検証した。

第一に、ファミリステールにおける具体的な建築的・都市的計画(1858)に至るまでのゴダンの諸経験に基づいた理念の形成過程を明らかにした。そして、フーリエ、オーエンのコミュニティー実験が失敗に終わってしまった理由の分析なども含め、一連の理想都市計画の整理を行った。その結果、オーエンのニュー・ハーモニーにおいては、理論から実際の運営に至るまで、彼のコミュニティー実験が現実的に続けられなかった複合的な要因が重なっていた。その中で共同体構成員たち間の自発的かつ自由な意見によってではなく、中央の計画により運営されたという状況が存在した。ここに、上からの計画を通じた共同体は人々を自由な主体にも、共同体の主体としても作り出すことはできないという示唆がなされた。そして、ファランステールの実験の場合は、本来その意に共感して資本を持って集まった人々がそのコミュニティーの中の労働活動を通じて楽しみを享受することができなかったこと、そして資本の不足と運営上の問題でコミュニティーが解散することになったことなどを指摘した。とくに工業と一夫一婦制を中心とする家族指向のコミュニティーの実験ではなく、農業と一夫多妻制を中心とした共同生活を前提としたという点から、大いにその限界点が出た。

第二に、オーエン、フーリエとゴダンの理論の相関、差異などを分析した。とくに、ゴダンの試みはフーリエ思想の直線的な実践化ではなく、独自路線の強いものであるという仮説を裏付けるとともに、単なる機能を越えて、個人と家族の人生を困らしたすべての要素を含む統合的な役割を担当するファミリステールを提案するまで、コミュニティー理論から実行へ移したゴダン独自の社会思想と彼の理想的コミュニティーに向けた労働者住宅に対する考え方について明らかにした。以上のことを図式化すると、図6のようになる。

図6 オーエン、フーリエとゴダンの理念の影響関係及び次稿以降の研究課題

しかしながら、図6が示しているように、現段階までに行った分析は、本来筆者が目指す一連の研究の中で、(1)「ファミリステールの実験の独自性と理想的コミュニティーに向けた労働者住宅に対するゴダンの考え方」にあたるものであり、(2)「建築・都市的側面からみた」ファミリステールの分析、ならびに(3)「19世紀から現代に至るまでの歴史的建造物としての保存・活用」については、本稿では扱わず別稿で論じたい。

注

- 注1) 18世紀後半から19世紀半ばに至る社会状況については、Leonardo Benevolo, Judith landy (英訳)、横山正 (日訳)『The origins of modern town planning』、1967 (M.I.T出版)、1976 (鹿島出版) など。
- 注2) ①フーリエのファランステールとゴダンのファミリステールの相関性について挙げられている文献としては、以下のとおりである。
- ・Meurant Jack, 『Une expérience fouriériste au XIXe siècle l'oeuvre de J.-B.A. Godin』 (Mémoire de Diplôme d'étude supérieures de Sciences politiques, Université Paris I, 1972).
 - ・Henri Desroche, 『La société festive : du fouriérisme écrit aux fouriérisme pratiqué』 (Paris : Seuil, 1975).
 - ・Guy Delabre et Jean-Marie Gautier, 『La régénération de l'utopie socialiste : Godin et le Familistère de Guise』 (Thèse de doctorat ès sciences économiques, 3 vol, Université Paris I, 1978), 『Godin et le Familistère de Guise -Une utopie socialiste pratiquée en pays picard』 (Vervins : SAHVT, 1983).
 - ・Leonardo Benevolo, Judith landy (英訳)、横山正 (日訳)『The origins of modern town planning』、1967 (M.I.T出版)、1976 (鹿島出版)
- ゴダンのファミリステールを社会住宅の起源の一つとして位置づけている研究もゴダンをフーリエ主義者として評価する。
- ・Roger-Henri Guerrand, 『Propriétaires et locataires: Les origines du logement social en France』 (Paris: Editions ouvrières 1966, Quintette, 1987), pp.121-150.
- ②つぎの研究書はゴダンに対してフーリエからの影響を認めながらも、フーリエとは違ったゴダンの多様な社会思想について挙げられている。
- ・Annick Brauman, 『Jean-Baptiste André Godin 1817-1888 : Le Familistère de Guise ou les équivalents de la richesse』 (Bruxelles, Archives d'Architecture Moderne, 1976, 1980, 2ème édition revue et augmentée).
- また、つぎの著書はファミリステールをファランステールの具体化として位置づけている。
- ・Guy Delabre (dir), 『Godin et le Familistère de Guise à l'épreuve de l'histoire』 (Actes du Colloque de Guise du 21 mai 1988, Reims : Presses Universitaires de Reims, 1989)
- ③一方、つぎの研究は後者の側面を見通しているとは言えないが、建築・都市史的観点からみると体系的に分析しているとは言えない。
- ・Guy Delabre, 『Vers une république du travail : Jean-Baptiste André Godin』 (Paris : Editions de la Villette, 1988, réédition revue et augmentée, 2000)
 - ・Thierry Paquot, Marc Bédarida, 『Habiter l'Utopie : le Familistère Godin à Guise』 (Paris: Editions de la Villette, 1982, 2004, 3e édition)
- 注3) ゴダンが自身の思想を表明し始めたのは1871年に出版された『社会的解決(Solutions sociales)』を通じて、ファミリステールの建設理由について明らかにしてからである。この著書は当時の労働者向けの彼のコミュニティーモデルに対する独自の理念と考え方を調べるために、一次史料として貴重なものである。
- 注4) 1858年1月26日にゴダンがカルランに返信した手紙として、ゴダンのファミリステールはフーリエ思想の直線的な実践化ではなく、独自路線の強いものであるという仮説を裏付けるために、一次史料として貴重なものである。
- 注5) 18世紀後半から19世紀半ばに至る社会状況については、Leonardo Benevolo, Judith landy (英訳)、横山正 (日訳)『The origins of modern town planning』、1967 (M.I.T出版)、1976 (鹿島出版) など。
- 注6) Robert Owen, 『Report to the County of Lanark』、1821, in G. D. H. Cole (ed.), 『A New View of Society and Other Writings』 (London: 1949) pp. 265-267.の他に、Pack joo-won 「19世紀の社会主義の夢と道 ; オーエンとフーリエ」、ガウリ学問共同体、2003、pp.6.など。
- 注7) Leonardo Benevolo, 『Le Origini dell'urbanistica moderna』、1967 ; Judith Landry (英訳), 『the origins of modern town planning』、MIT出版、1967 ; 横山正 (日訳), 『近代都市計画の起源』、鹿島出版社、1976、pp.70.の他に、Robert Owen, 『Report to the County of Lanark』、1821, in G. D. H. Cole (ed.), 『A New View of Society and Other Writings』 (London: 1949) pp. 267-276.、金

- 栄勲、「『調和と協同の町』に現れるオーエンの社会思想及び空間配置の特徴に関する研究」、大韓建築学会論文集、2002、pp.78.など。
- 注8) Drawn and engraved by F. Bate. Published by 「*The Association of all Classes of all Nations*」、at their institution、69、Great Queen Street. Lincoln's Inn Fields、London、1838.より
- 注9) 縫田清二、「ユートピアの思想-個と共同の構想力」、pp.271.
- 注10) Leonardo Benevolo、「*Le Origini dell'urbanistica moderna*」、1967；Judith Landry (英訳)、「*the origins of modern town planning*」、MIT 出版、1967；横浜正 (日訳)、「近代都市計画の起源」、鹿島出版社、1976、pp.94.
- 注11) Annick Braumann、「*Jean-Baptiste André Godin 1817-1888 ; Le Familistère de Guise ou les équivalents de la richesse*」、Deuxième édition revue et augmentée、1980
- 注12) 詳しく言及すると、ファミリステールは住居施設、学校、商店、工場などの全体を意味し、社会宮殿はファミリステールの中に建てられた相互連結した三軒の共同住宅を意味する。しかしゴダンを含め、当代の人々、そして、既存の研究者たちにより、この二つの用語があまり区分されずに挙げられているものの、本来筆者が目指す研究と本稿における社会宮殿は住居施設だけを意味する。
- 注13) Pack joo-won 「19世紀の社会主義の夢と道；オウエンとフーリエ」、ガウリ学問共同体、2003、pp.16
- 注14) オーエンのコミュニティ実験に関する研究；R. G. Garnett、「*Robert Owen and the Community Experiments*」in Pollard and Salt (ed.)、Robert Owen : Prophet of the Poor (Lewisburg, 1971)を参照
- 注15) G. D. H. Cole、「*Socialist Thought: The Forerunners 1789-1850*」(London: 1962)、「社会主義思想史1」、LEE Bang-Suk (韓訳)訳、1987、pp.14.
- 注16) Pack joo-won 「19世紀の社会主義の夢と道；オウエンとフーリエ」、ガウリ学問共同体、2003、pp.16
- 注17) BYUN Gi-Chan、「フーリエの“文明”批判」、フランス史研究3、2000.8、pp.53-77.
- 注18) BYUN Gi-Chan、「フーリエのファランステールと女性の性的解放」、フランス史研究5、2001.8、pp.153-175.、YOOK Su-Young、「ユートピア社会主義」、pp.416-419.
- 注19) K. Marx、「*Grundrisse*」、trans. by M. Nicolaus (New York: Vintage Books、1973)、pp.611-612.
- 注20) Le Syndicat Mixte du Familistère Godin、「*Voyage en Utopie*」、2008.より
- 注21) 文化省 (Ministère de la Culture) は、フランスの文化行政を担当し、国立博物館と記念碑に関しこれを管理している。その他、絵画、彫刻、演劇、舞踊、建築、文学、放送、映画などの広範な芸術分野を管掌し、フランスの国内外で保護・振興策を推進している。フランスにおける文化遺産保護制度は、1830年頃に歴史的建造物監察総監が文化遺産管理の任にあたったことから始まる。1887年に歴史的建造物の保護に関する法律が制定され、その後保護の対象は天然記念物や史跡にも拡大されていった。
- 注22) Ibidem、より
- 注23) Syndicat Mixte du Familistère Godin、「*Voyage en Utopie*」、2008.より
- 注24) 1840年に二人の労働者を雇用したゴダンの事業場は、1846年に30人、1880年に1500人を雇用するほど発展した。1880年には関連品目の生産において世界最高であった。-Thierry Paquot、Marc Bédarida、「*Habiter l'utopie*」、pp.17.、Annick Brauman、「*Jean-Baptiste André Godin*」、pp.45.
- 注25) ゴダンの若い時期についてはJean-Baptiste André Godin、「*Solutions sociales*」、pp.8-12、pp.42-43. Guy Delabre、「*Vers une république du travail*」、pp.24-26. Jean- François Rey、「*Jean-Baptiste André Godin*」、Jean-Paul Thomas、「*Godin Fouriériste?*」、Thierry Paquot、Marc Bédarida、「*Habiter l'Utopie*」、pp.26-27pp.48-49. Marie Moret、「*Documents pour une biographie complète de J.-B. A. Godin*」(Guise:Familistère、3 vol、1901、1906、1910)
- 注26) J.-B.A.Godin、「*Solutions sociales*」、1871、pp.281-282.
- 注27) 競争が引き起こす弊害は、産業的略奪と模造品の生産、生産品の価値下落、賃金減少、ストライキと労使葛藤、産業的危機と失業、産業中心地の没落などである。J.-B.A.Godin「*La République du travail*」、pp.351-352.
- 注28) J.-B.A.Godin、「*Solutions sociales*」、1871、pp.261.
- 注29) Ibidem、pp.216-220 ;義務、権利、正義の概念との相関性について説明
- 注30) Ibidem、pp.123.、J.-B.A.Godin、「*Mutualité sociale*」、pp.29.
- 注31) J.-B.A.Godin、「*Solutions sociales*」、1871、pp.208.
- 注32) J.-B.A.Godin、「*La République du travail*」、pp.343.、次の段落で詳述している「国家的次元からの貧困消滅のための社会的相互扶助の強調」にも相当する。
- 注33) J.-B.A.Godin、「*Le Gouvernement*」、pp.354.、pp.348.
- 注34) 国家においては個人が自由に労働し、その結果で富裕になることに介

入してはいけない。ただし個人が死亡する場合、個人の全財産はその時点から国家に還元される。一方、遺産相続の場合は、遺産相続者が労働によって得られたものではないため禁止される。そして国家に還元された財産は、人々の自由な労働を保障するために各種制度の準備や社会的相互扶助基金などで使われる。: J.-B.A.Godin、「*La République du travail*」、pp.343、p.216.

注35) J.-B.A.Godin、「*Solutions sociales*」、pp.260.

注36) J.-B.A.Godin、「*Le Gouvernement*」、pp.456-457.

注37) ゴダンは、建築は人間が必要とする物質的要素の中でもっとも重要な位置を占めるものと見なした。また、建築は人間と社会をつなげるものとして、いわゆる建築の進歩は人間生活の社会的進歩向上につながると考えていた。: J.-B.A.Godin、「*Solutions sociales*」、pp.418.

注38) Ibidem、pp.425-434.

注39) J.-B.A.Godin、「*Le Gouvernement*」pp.123-124.

注40) J.-B.A.Godin、「*Solutions sociales*」pp.427.

注41) フーリエのファランステールは、多様な才能を持つ老若男女一人一人で構成され、情念作用の極大化に向かうコミュニティモデルであり、ゴダンのファミリステールは劣悪な住居環境で暮らしていた労働者家族向けのコミュニティモデルであると言える。とくにゴダンは基本的に建築の役割を強調し、人間が必要とするものすべてをそろったコミュニティモデルを目指した。ここには光・換気・空間などの公衆衛生を考慮した建築的設備のみならず、人々のコミュニティ形成を促す制度的装置、そして、住居・教育・商業・文化・工場施設など職住分離を基本としたゾーニングに至るまでの彼の現実的かつ近代的な考え方が出されている。

注42) J.-B.A.Godin、「*Solutions sociales*」、pp.146-151.、Thierry Paquot、Marc Bédarida、「*Habiter l'utopie*」、pp.29-30.

注43) ゴダンが何故カルランに社会宮殿の計画を任せなかったのかについて論じている資料は、ほとんどないといえよう。しかし、ゴダンにより1871年に出版された「社会的解決 (Solutions sociales)」を見ると、テキサスでファランステールという理想的コミュニティを実験しようとしたフーリエの弟子たちの能力を信じたゴダン自身の間違った考えを改め、工場の労働者たちのための新たな住宅団地を計画し、社会的改革を試みようとしたことを裏付けることができる。さらに、ファミリステールを計画するに当たっては「これ以上フーリエ主義者たちの考えを元にする実験にはならないだろう」と述べている。

: J.-B.A.Godin、「*Solutions sociales*」、pp.150-151.

*ファミリステール実験の独自性について

-協会 (Syndicat Mixte du Familistère Godin) の総責任者、フレデリック・パニ (Frédéric k. Panni) とのインタビューにより

■ファミリステールの建築的実験は、フーリエの理想共同体 (ファランステール) をそのまま実現したと考えるか、それともゴダンの独自の実験であったと考えるか。

: フーリエとゴダンについて簡単に説明すると、フーリエはファランステールという共同体理論に留まったとすれば、ゴダンはフーリエの基礎理論と自身の独自の社会思想に基づき、現実的な提案を直接実現したと言える。すなわち、ファミリステールにはファランステールと比べてみると、もっとも幅広いアイディアと近代的な考え方が豊かに表れている。たとえば、労働者生活と住居問題など与えられた現実問題を建築的な観点から積極的に計画したことが確認できるのである。

■ゴダンとヴィクター・カルラン (Victor Calland) との関連性について

: ゴダンはカルランと3通の手紙のやりとりをしながら、ファミリステールの基本計画にかかわる協議を行った。しかしながら、ゴダンはカルランが提示したファミリステールの基本計画案に対して現実性の乏しい考えであると判断していた。その理由は、カルランがファミリステールにおける財政状況や労働者たちのための住居空間などを考慮した漸進的な発展計画案ではなく、利益だけを追い求めていたし、現実離れた計画案を考えていたと判断したためである。すなわち、ゴダンはファミリステールの建設にあたって財政が充分でないなかで、段階的に建設することが正しいと考えたのである。つまり、「注2)の①の文献」で一般的に挙げられているように、「ファミリステールの三つの建物 (社会宮殿) の建設は、フーリエ主義者であり、建築家であるカルランの計画案から始まったとみる」ことは誤った内容であると言える。

注44) Annick Brauman、「*Jean-Baptiste André Godin, 1817-1888 ; Le Familistère de Guise ou les équivalents de la richesse*」、Deuxième édition revue et augmentée、1980.より

(2009年4月8日原稿受理、2009年9月30日採用決定)